

## 看護基礎教育における模擬患者を導入した看護過程の教育効果とその課題

(模擬患者 / 看護教育 / 看護過程)

福間美紀\*・津本優子\*・内田宏美\*

佐原淑子\*・樽井恵美子\*・長田京子\*

### Effects and Problems of the Teaching Method on the Nursing Process Using Simulated Patient

(simulated patient / nursing education / nursing process)

Miki FUKUMA\*, Yuko TSUMOTO\*, Hiromi UCHIDA\*

Yoshiko SAHARA\*, Emiko TARUI\*, Kyoko OSADA\*

Effects of the teaching method using the simulated patients (SP) on the nursing process (NP) in the fundamental nursing education were examined. Learning quality with the SP was qualitatively analyzed from the self-evaluation of the understanding and the content of the reports of the students. The following results were obtained.

In both student groups, "necessity of NP on nursing practice" and "importance of based on the nursing theory" were high score. Understanding of "how to collect the data about the patients" was higher and "how to write the factor-related map" was lower in case of SP than the paper-patients.

The learning factors were identified as "the component of NP", "the concept of NP", "perspective of nursing" and "nursing philosophy", which consisted of 22 categories. Influence factor consisted of three categories was found.

The students experienced the knowledge to form interpersonal relationships through implementation of the NP with SP and also were able to learn how to solve problems based on the relationship with patients.

---

紙上事例による看護過程の学習方法を補完するために、情報収集から評価に至る全過程を、模擬患者を用い実践に即して体験する演習を試みた。演習後に行った理解度の自己評価、および学びを綴ったレポート内容を分析し、次の結果を得た。

自己評価の比較では「看護過程を展開する必要」、「看護理論に基づいて行う必要」に関する理解が、紙上事例で学んだ学生群、模擬患者で学んだ学生群共に高かった。「情報収集の方法」の理解は模擬患者群が、「関連図の書き方」の理解は紙上事例群で有意に高かった。レポートの分析により、22のカテゴリーからなる4つの学習内容の因子〔看護過程の構成要素〕〔看護過程の概念〕〔看護の視点〕〔看護観〕、および、3つのカテゴリーからなる〔影響因子〕が抽出された。

模擬患者に対して実践的に看護過程を展開することで、看護過程の本来の在り方である「患者との関係を基盤とした問題解決思考の過程」を学習したと考える。

---

#### I. はじめに

看護過程は、看護問題の解決を目標として、個別的な看護ケアを系統的・計画的に行なう看護活動のプロセスであり、人間関係の形成過程を基盤として展開さ

れる。看護過程を展開する能力は経験を通して習熟していくが、その基礎的能力は看護基礎教育において習得すべきものである。看護の実践過程を学ぶことは、初学者である看護学生にとって難解であるため、様々な教授方法が試みられている。その多くは、紙上事例の情報を用いてアセスメントを行なうもので、看護過程のうち看護診断までの過程に重点を置いたものである。しかし、紙上事例による演習は、実践・評価を含む看護過程を実践的に学ぶことができないだけでなく、

---

\*島根大学医学部看護学科基礎看護学講座

患者の情報収集が予め提示された内容に留まるため、アセスメントの視点を広げることができないなどの限界がある。このような学習方法の問題点を補完する教授方法のひとつとして模擬患者を用いた教育が試みられるようになってきている。模擬患者を用いることで、事例のイメージがつきリアリティーのある情報が看護過程の学習効果を高め<sup>1)</sup>、教員の関わりによって学生の看護に対する認識の発展がもたらされる<sup>2)</sup>と報告されている。しかし、情報収集から評価までの全過程をとらして模擬患者を用いた教授方法による効果を検証した論文は見当たらなかった。

本研究は、紙上事例を用いた看護過程の教授方法から、情報収集・アセスメント、看護診断、看護計画、実践、評価のすべての段階を教員が演じる模擬患者とのかわりのなかから学ぶ方法に変更した教授方法の評価を行い、看護基礎教育における看護過程の学習方法を検討するものである。

## II. 研究目的

演習形態の違いによる、看護学生の看護過程に関する理解度の差を明らかにする。

模擬患者演習による看護学生の学びを明らかにする結果から、今後の看護基礎教育における看護過程の学習方法の課題を検討する。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

看護過程の概念についての学習と演習を初めて体験する平成16・17年度A看護系大学の2年生各60名を対象とした。

### 2. 研究期間

研究期間は平成16年4月～平成17年7月

### 3. 演習方法

2年次に開講されている『看護過程論』の授業の中で、架空の事例について看護過程を展開した。平成16年度の紙上事例による演習（以下、紙上事例演習とする）では、上腕骨骨折患者（事例1）と肝細胞がん患者（事例2）と平成17年度の模擬患者による演習（以下、模擬患者演習とする）では事例1のみを用いた。両演習の演習体制、教育体制および授業スケジュールは表1に示す。

紙上事例演習では、あらかじめ学生に事例1の患者

情報を配布資料で提示し、その後学生が患者役の教員に対しインタビューを行い追加情報の収集をした。それをもとに学生が個々に患者のアセスメント、看護計画の立案を行った。事例2では紙上での情報をもとに、アセスメントから看護計画の立案までを行い、それをもとにグループで討議し、全体発表を行った。教員はそれぞれの学生の進行度に合わせて個別に指導を行った。

模擬患者演習では、事前に教員が演習の目的・方法を打ち合わせし、事例の全体像を十分に把握した上で患者役を演じた。学生への初回の患者情報の提供は氏名、年齢、性別、疾患名のみとし、看護を行う上で必要と思われる情報を意図的、系統的に情報収集するための方略をグループで検討した。それを基に代表者が模擬患者に対して、情報収集を行い、得た情報をアセスメントし、看護計画を立案するまでの作業をグループで行った。そしてグループの看護計画に沿って、代表者が模擬患者に対しケアを実践し、模擬患者の反応をもとに評価し、再アセスメントした。教員はグループ討議の際にファシリテーターとして参加した。

### 4. データ収集と分析方法

#### 1) 紙上事例演習と模擬患者演習との理解度の比較

無記名の自記式質問紙により、それぞれの演習で看護過程の各プロセスについての理解度などを含む12項目について調査を行った。学生は項目毎に「よくわかった」「大体わかった」「あまりわからなかった」「全くわからなかった」の4段階尺度で自己評価し、評価が高いものの点数が高くなるように1～4点に点数化した。調査対象の学生は『看護過程論』を受講するまでに同じカリキュラムで学習を積み重ねており、同程度のレディネスと学力の母集団であると判断した。両演習で共通した9項目について紙上事例演習と模擬患者演習をマン・ホイットニーのU検定にて比較を行った。

#### 2) 模擬患者演習での学生の学び

授業終了後に「看護過程について学んだこと」のA4用紙一枚程度のレポートの記述から1文に一つの意味が含まれるように抽出し、それをコードとした。抽出されたコードを意味内容の類似性に従い、コードをまとめカテゴリー化した。カテゴリー化はサブカテゴリー、カテゴリーと抽象度をあげてゆき、類似したカテゴリーを因子として抽出した。

データの信頼性を高めるためには、生データと研究者の抽出したコードを対照できるように記述し、共同研究者と検討を繰り返した。

表1 『看護過程論』の学習体制および教育体制

		紙上事例演習	模擬患者演習
期間		平成16年4月～7月	平成17年4月～7月
演習で行った事例		事例1(20歳女性、右上腕骨骨折患者) 事例2(52歳女性、肝細胞癌患者)	事例1(20歳女性、右上腕骨骨折患者)
学習体制	学生数	10人程度	6～7人
	事前学習・事後学習	個人ワーク	GW
	GWの内容	最終の発表の際の資料作り	情報収集の内容などから看護過程の全段階で作戦会議を実施
教育体制	教員数	事例1:4人、事例2:6人	6人
	担当するグループ数	2グループ	2グループ
	教員の役割	個別指導	GWのファシリテーター
スケジュール		看護過程の概念 ロイ理論のアセスメントガイドの資料配布	看護過程の概念
		事例1:紙上での情報収集 (患者の病歴、社会背景などのすべて)	事例1の情報提供 (氏名、年齢、疾患名、性別のみ) アセスメントの準備(GW)
		教員が患者役を演じ情報提供 ロイ理論の枠組みでアセスメント	<u>事例1の模擬患者から情報収集</u> 情報収集・アセスメント・フィジカルアセスメント(関連図・看護計画ふくむ)(GW)
		事例1:問題抽出・関連図 (NANDAの看護診断分類の紹介)	<u>事例1の模擬患者から情報収集</u> 再アセスメント(関連図・看護計画ふくむ)(GW)
		事例1:目標・計画立案	事例1のまとめ、発表
		事例2:紙上での情報収集	事例1の解説とまとめ 看護理論と看護過程
		事例2:アセスメント 理論枠組みはロイ・オレム・ヘンダーソンから選択	事例1の系統的アセスメントの準備(GW) 理論枠組みは自由に選択
		事例2:問題抽出	<u>事例1の模擬患者から情報収集</u> 系統的アセスメントの実施(GW)
		事例2:関連図	事例1の模擬患者へ実践の準備(GW)
		事例2:計画立案(GW)	<u>事例1の模擬患者へのケア実践</u> グループの代表者が計画した看護の実践 その反応から評価・再アセスメント(GW)
		事例2:担当教員別のアセスメント・看護計画の発表	事例1:全体発表

模擬患者とのかかわりは斜体、グループワークはGWで示す

## 5. 倫理的配慮

対象者に研究の主旨、内容、レポートの分析および研究成果の公表について説明を行い、研究協力者に文書および口頭で研究の目的、方法、協力は個人の自由意志に基づくこと、特に授業の成績等の個人が不利益になるような事態は生じないこと、協力の撤回について説明し、文書で研究の同意を得た。また、調査用紙は無記名自記式の質問用紙で、提出は自由意志であることを説明し、回収した。なお、本研究は島根大学医学部看護研究倫理委員会の承認を得て実施した。

## IV. 結 果

### 1. 演習形態の違いによる理解度の自己評価の比較

紙上事例演習と模擬患者演習における看護過程の理解度の自己評価の平均値と両演習の比較を表2に示す。

いずれの演習でも、「看護過程の必要性」と「理論に基づいて行う必要性」で理解度が高かった。理解度が低かったのは、紙上事例演習が「看護目標の立て方」( $2.74 \pm 0.55$ )、模擬患者演習が「関連図の書き方」( $2.72 \pm 0.55$ )であった。

理解度の有意差をみると、模擬患者演習は紙上事例演習よりも「情報収集の方法」の理解度が高く(紙上事例： $2.88 \pm 0.53$  < 模擬患者： $3.12 \pm 0.50$ ； $P = 0.03$ )、「関連図の書き方」(紙上事例： $3.00 \pm 0.50$  > 模擬患者： $2.72 \pm 0.55$ ； $P = 0.01$ )の理解度および「看護診断への興味」(紙上事例： $3.09 \pm 0.61$  > 模擬患者： $2.80 \pm 0.69$ ； $P = 0.01$ )が低いという結果であった。有意ではないが、「看護目標の立て方」や「看護計画の立て方」についての理解も模擬患者演習の方が高い傾向であった。

### 2. 模擬患者演習による学生の学び

模擬患者を導入した看護過程についての学生の学びのレポート内容について質的分析の結果を表3に示す。

模擬患者演習による学生の学びには、22のカテゴリーからなる4つの学習内容の因子〔看護過程の構成要素〕〔看護過程の概念〕〔看護の視点〕〔看護観〕と3つのカテゴリーからなる〔影響因子〕の5つの大カテゴリーが抽出された。これらの因子間の関係性は以下に示す。学生は、看護過程の情報収集、アセスメント、看護診断、実践、評価の看護過程の構成要素と看護過程を展開する上で必要な看護過程の意義や思考などの看護過程の概念について理解をしていた。この際に、看護の個別性やニーズに合わせることなどの看護の視点を学習した。さらに、その学習をきっかけとして患者を全人的に捉えることや看護ケアは患者との相互作用によって行われることなどの看護観の獲得にいたった学生もいた。

これらの学習を促進させた影響因子は、学生自らが主体的に学習していく必要性に気づいたことやグループ学習の利点を活かすことができたことなどである。

## V. 考 察

### 1. 演習形態の違いによる理解度の比較

模擬患者演習では、「情報収集の方法」について紙上事例より高い理解度を示していた。学生は、模擬患者に向き合い、実践に近い形で情報収集をしたことで、系統的に患者から情報収集ができ、患者像および看護場面のイメージ化をはかれたためと推察される。模擬患者とのかかわりやグループワークによる系統的な情報収集・アセスメントは、より焦点化された看護目標や看護計画の立案につながっていく。そして、グループで立案した看護計画を実践し、評価することで対象者の反応を得られ、あらためて看護過程の展開が看護実践に必要なものであるという実感につながっているといえる。

紙上事例演習では、NANDAあるいはゴードンなどの看護診断について紹介し、それをを用いることをすす

表2 演習形態の違いによる理解度の自己評価の比較

平均値 ± 標準偏差

	紙上事例	模擬患者	p値
	n=58	n=43	
看護過程の必要性	3.55 ± 0.60	3.56 ± 0.59	
理論に基づいて行う必要性	3.05 ± 0.76	3.28 ± 0.67	
情報収集の方法	2.88 ± 0.53	3.12 ± 0.50	*
アセスメントの方法	2.88 ± 0.56	2.81 ± 0.45	
健康問題の抽出方法	2.75 ± 0.51	2.86 ± 0.47	
関連図の書き方	3.00 ± 0.50	2.72 ± 0.55	*
看護目標の立て方	2.74 ± 0.55	2.88 ± 0.45	
看護計画の立て方	2.78 ± 0.59	2.86 ± 0.47	
看護診断への興味	3.09 ± 0.61	2.80 ± 0.69	*

p<0.05

表3 模擬患者演習から得られた学生の学び

因子	カテゴリー	サブカテゴリー
看護過程の構成要素	情報収集の方法	観察による患者像の把握の重要性 患者の状態に合わせた情報収集など
	情報収集の必要性	アセスメントに必要な情報収集 看護ケアの基盤となる情報収集など
	情報の関連づけ	看護問題を明確化するためのアセスメント 情報の関連性を明らかにする関連図など
	アセスメントの視点	患者そのものをとらえることの重要性 多角的アセスメントの重要性など
	問題の優先性	優先する問題を見極めることの重要性
	看護介入の多様性	多様な援助方法を吟味して選択する必要性 着目点の違いによる多様な援助方法など
	看護実践の評価	看護実践での患者の反応の評価 評価による看護計画の修正
看護過程の概念	看護にいかすコミュニケーション	看護過程におけるコミュニケーションの必要性
	看護過程のサイクル	フィードバックに基づく再計画 らせん状に展開する看護過程
	看護過程の思考	看護過程のプロセスの必要性 段階をおった看護過程など
	看護過程の意義	看護実践における看護過程の重要性 看護の視点における看護過程の重要性など
	理論活用の意義	患者にあった理論の選択 理論活用による根拠に基づいた看護過程など
看護の視点	看護の個性	患者情報を活用した個別的な看護 患者の個性に応じた看護計画の必要性など
	患者の視点	患者の気持ちを優先した看護介入 患者の立場にたった視点の大切さなど
	ニーズに合わせた看護	患者が望むケアを計画する必要性 患者のニーズにあった看護の提供
	セルフケアの促進	患者のセルフケアを促進する看護計画 患者のセルフケアにあった計画をする重要性など
	生活の視点	生活行動をイメージすることによる具体的な看護計画の必要性
看護観	全人的な看護の視点	患者全体を捉える看護の視点 身体的、精神的、社会的な視点の必要性など
	看護のインフォームドコンセント	患者の自己決定権の尊重 タイムスケジュールの関するIC
	患者と協働する看護	患者とともにつくる看護の場
	チーム医療のための看護過程	安定したケア提供のための看護計画の共有
	看護ケアの相互作用	看護師の熱意が伝わる喜び 患者の反応が得られる看護ケアの実感 ケアへの反応に対する看護者の喜び
影響因子	学習の必要性	患者ごとに必要な学習の気づき ケアに必要な専門知識の必要性など
	看護知識の統合	アセスメントのための知識の必要性 知識を活用した根拠に基づいた看護過程など
	グループ学習の意義	グループ発表による視点の拡大 グループワークを通じた意見交換の活用など

めていたため、看護診断への興味が高かった。一方、模擬患者演習では、根拠を持ってアセスメントし、学生自らが看護上の問題の抽出を行うことに重点を置いていたため、あえて看護診断分類などの診断ラベルを用いるように指導はしていなかった。カルテの電子化がすすみ、それに伴い看護診断分類も広く活用されて

きている現状を考えると、今後は看護診断分類の活用も授業内容として触れていく必要がある。

紙上事例演習でアセスメントや関連図の理解が高い傾向にあった。それは、紙上事例演習では事例1と事例2の模擬患者演習と比較して繰り返しの経験によって理解が高かったと考える。アセスメント能力は授業

のみで習得できるものではなく、繰り返し学習することで習熟されるものである。したがって、アセスメントについては看護基礎教育初期の学生の『看護過程論』におけるアセスメント能力の到達目標を明確にした教育を展開する必要があることが示唆された。さらに、小田<sup>7)</sup>は関連図の教員へのコメントを分析し、学習支援として事例理解のための知識不足に対して事前学習の告知や関連図の丁寧なオリエンテーションについて言及している。本研究でも同様に、教員がグループの進行度に合わせた関連図について学習支援をする必要があることを示している。

## 2. 模擬患者演習を通じた学生の学び

模擬患者演習でのレポート内容の分析から以下のことが言える。従来の紙上事例では患者像を十分にイメージ化し、実際の患者像を想起することができない場合が少なくなく<sup>5)</sup>、イメージした患者とのギャップがあること<sup>6)</sup>の指摘がある。さらに、紙上事例演習では限られてはいるものの一定のアセスメントが可能な情報が提供されているが、そのアセスメントには限界がある。一方、模擬患者演習では、看護を行ううえで必要な情報を自分で判断し、系統的に情報収集し、模擬患者とのやり取りの中で、活きた患者にふれ、患者を生活者として全人的に捉える視点をもった看護過程の展開をすることができる。そして、看護過程の概念にとどまらず、看護の基盤となる看護の視点の獲得に至ったと考える。さらに、看護の視点を持って計画した看護の実践を含むすべてのプロセスを模擬患者に行うことで、実践に対する手応えとして患者からの反応を得て、患者に自らの熱意が伝わる喜びを感じ、学生ではありながらも一人の看護者としての看護観を芽生えさせるきっかけとなったと考えられる。

模擬患者演習は、学生が看護過程のすべてを模擬患者とのかかわりを通して展開することで、患者の活きたイメージを膨らませ、看護過程の基盤となる問題解決過程と人間関係の形成過程を習得させると示唆している。

## 3. 今後の看護過程教育の課題

学生は、模擬患者の導入による看護過程の授業展開で、これまでの看護に関連する知識を統合させ、アセスメントすることで、患者に適した看護を提供することに気づき、看護過程の理解を促進したと考える。さらに、演習ではグループで個々の学生が活発な意見交換を行うことで、対象者の健康問題を焦点化し、的確にとらえ、適切な看護展開につながった。学生はあ

らかじめすべての情報収集を提示している演習とは異なり、学生の能力によってはアセスメントに十分な情報収集ができないことも考えられる。したがって、模擬患者を導入した看護過程の教育課題は、学生のグループダイナミクスを促進するような教育的かかわりが必要となる。教員がグループのファシリテーターとして十分機能を発揮することで学生の学習効果を高めるといえる。

アセスメントおよび関連図の方法の理解については模擬患者を導入した学習では理解を促進することができなかった。看護過程の習得には十分な専門知識の獲得と繰り返し学習が必要である。そこで、看護基礎教育での看護過程の到達目標の設定と今後の学習への継続が課題となる。

## 4. 本研究の限界

本研究の分析対象は、平成16年度と17年度の異なった母集団を対象としており、この結果を紙上事例演習と模擬患者演習の教育効果をして一般化するには限界がある。

## VI. まとめ

紙上事例演習と模擬患者演習の比較および模擬患者演習の学生の学びの分析から以下の示唆を得た。

- 1) 模擬患者を導入した看護過程の学習方法は、対象者のイメージを的確にとらえ、問題解決思考過程と人間関係形成過程に基づいた看護過程の概念やその意義の理解を促進していた。
- 2) 模擬患者に対して看護を実践し、実践に対する患者の反応をとらえることで、一人の看護者としての看護観を芽生えさせるきっかけとなる。
- 3) 模擬患者演習では、教員の学習支援体制や看護基礎教育での看護過程の到達目標の設定と今後の学習への継続が課題となる。

## 文 献

- 1) 田中初江, 佐藤和子, 村田日出子他: 模擬患者参加型の看護過程教育の実践 より実践に即したイメージしやすい教育効果を目指して, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 2; 1-11, 2005
- 2) 和住淑子, 山本利江, 青木好美他: 模擬患者への看護体験による看護学生の認識の発展, 千葉大学看護学部紀要, 26; 63-67, 2004
- 3) 堀口雅美, 大日向輝美, 酒井英美他: 基礎看護学

- における看護過程演習方法の検討 模擬患者を活用したアセスメント学習, 日本看護学教育学会誌, 10(2); 219, 2000
- 4) 和田攻他編: 看護大辞典; 2666, 医学書院, 2002
- 5) 藤崎 郁: 模擬患者を活用した心理社会的側面のフォーカスアセスメント能力の養成プログラム, Quality Nursing, 17(7); 13-20, 2001.
- 6) 加悦美恵, 飯野矢住代, 河合千恵子: 基礎看護学におけるSP参加型の授業と臨地実習の連繋 - 学生の臨地実習の体験のふりかきから -, 日本看護学会誌, 26(2); 67-75, 2006.
- 7) 小田和美, 小野幸子, 兼松恵子他: 紙上患者の事例を活用した看護過程演習における教育上の課題(第1報) - 関連図への教員のコメント内容の分析を通して -, 岐阜県立看護大学紀要, 4(1); 105-111, 2004.

(受付 2006年9月29日)

